

幼 児 の 教 育

昭和七年七月

美しい田舎の子どもの夏

草が一ぱいに茂つてゐる。馳けてもく野は廣い。丘を越えて、目の果ては山だ。山の上は蒼いく大空だ。

立ち止まつて上を仰げば、ぎらつく太陽の下に、なんとといふ美しい白い雲だ。一ぱいに胸を張つてうたへば、どこまで遠くくゆく歌の聲か。

林がある。梢をもれて射し込んでゐる日光の青白さ。しつとりとした黒い土の冷たさ。ひやりとする静かさの奥で、いつもの親しい小鳥が啼いてゐる。

小川がある。底のすきとほつて見える清い流れに、小魚の群が列をなして泳いでゐる。逃げてゆくのを追ふて、さぶくと土橋の下へ来れば、河骨の花の黄色に咲くあたり、眞黒なとうすみ蜻蛉が、すいくと飛んでゐる。

美しいのは田舎の子どもの夏だ。